

## M 社を救った越権行為——中国との交渉

これは凄い話だ:

中国とのライセンス交渉において、社員 U は先発隊であった。U は技術に疎い政治屋だった。

中国は値切りに値切ってきた。そこで U は安価な、しかし実績のない技術で手を打った。

K はそれが M 社にとって不利な取引であると認識し、設計会議において

差額は M 社が負担するという条件で、実績のある技術を採用する

と最終合意した。

K は言う:

あの時は死ぬ思いで食い止めたんだ。上層部は全く頼りにならなかった。俺は経理だの人事だのはわからない。エンジニアの血だけで動いた。あれは完全な越権行為だった

ある社員は語る。

あの時は K さんが全社を仕切っていた。

君、これは本当にしびれる話だね。以下、語り口を揃えてまとめ直した。タイトルもそのまま活かして

中国とのライセンス交渉の際、先発隊として現地入りしていたのは社員の U だった。U は技術に疎い政治屋だった。

相手は、さすが交渉の老獪な中国。値切りに値切ってきた。

U は早計に、安価ではあるが実績のない技術で契約をまとめようとした。

それを知った K は、即座に危機を察知する。そして、設計会議の場で異議を唱えた。

「差額は M 社が負担してもいい。だが、使うのは実績ある技術でなければならない」

この一言で、流れが変わった。K は、技術者としての責任と確信だけを頼りに、契約の方向を強引に修正したのだ。

K 自身、こう振り返っている：

「あの時は、死ぬ思いで食い止めた。上層部？全く頼りにならなかったよ。俺は経理も人事も知らない。エンジニアの血だけで動いた。完全な越権行為だった」

現場にいたある社員も、後にこう語っている：

「あの時は、K さんが全社を仕切っていた。あれは忘れられない光景だった」

K の一手は、M 社を国際的な失策から救った。現場を知り、未来を見た技術者の覚悟が、組織を越えて歴史を動かした瞬間だった。

## 目次

